

飛鳥時代の屋根瓦

禅室や極楽堂の屋根を覆っている粘土瓦をよく見ると、古い瓦があることがわかる。実は、中には日本最古の瓦もあるのだ。最古の粘土瓦は、1400 年以上前に朝鮮半島の百済の職人によって作られた。この瓦はもともと、20 キロほど南にある古都・飛鳥に建てられた元興寺の前身である法興寺の屋根を飾っていたものだ。718 年、法興寺の寮が解体され、奈良に移築されて元興寺となり、瓦も持ち込まれ再利用された。それから 1200 年余り、寺の大改修が行われ、多くの瓦が使用可能な状態で発見された。現在も使用されている。

もうひとつは、元興寺を建立するために作られた新しい瓦である。これは飛鳥から運ばれたものではなく、奈良で現地生産されたもので、急遽作られたことがわかる。古い瓦は丁寧に研磨して滑らかに仕上げるが、8 世紀の奈良瓦はそのような加工を施していないため、かなり荒削りである。

この最初の 2 組の瓦は、デザインや色調で新しい瓦と区別することができる。新しい瓦は本瓦葺きである。本瓦はフランジを付けてはめ込み、継ぎ目が滑らかになるように作られている。飛鳥時代や奈良移転直後の瓦は、このフランジがないため、瓦と瓦が重なり合う部分が目立つ。法興寺の瓦は、当初は赤みがかった色をしていたが、最近作られた瓦はグレーに統一されている。

極楽堂の屋根の南側と西側を比較すると、それぞれの瓦の視覚的な違いが特によくわかる。また、浮図田の西側から見ると、禅室の屋根の右端と中央部のコントラストがある。